

“高専発高専行”の大学院生活

My Doctoral Course Life “from KOSEN to KOSEN”

周 藤 将 司*
(SUTO Masashi)

I. はじめに

筆者は地方の工業高等専門学校（以下、「高専」という）を卒業し、現在はその母校に教員として勤務している。本稿では、キャリアパスの一例を示すために、時系列に自身の経験などについて述べる。また、教育の現場に勤務する身として、大学における人材育成に通じる高専の立ち位置について述べる。博士課程への進学を考えている学生や博士課程在学中の学生の皆さんにとって、また、人材確保が急務となっている大学の先生方の参考になれば幸甚である。

II. 博士課程に進学するまで

私は松江工業高等専門学校土木工学科（現 環境・建設工学科）を卒業している。高専は5年制であり、5年生になると指導教員のもとで卒業研究を行う。私は、コンクリート工学を専攻する研究室に入った。そのときの指導教員の先生が鳥取大学農学部の卒業生であったため、まさに、「すべてはここから始まった」である。興味を持っていたコンクリートの凍害に関するテーマで卒業研究に取り組むことになり、進学した専攻科でも引き続き凍害に関する研究を行った。専攻科修了後は、大学院への進学を希望し、この時点ですでに研究でお世話になっていた先生の研究室に入ることを目指した。希望した鳥取大学大学院農学研究科に合格し、「農学部？ なんて?? 工学部じゃなくて??」と多くの友人に言われながら進学した。

修士課程に進学し、普段の学校生活の中で印象的であったのは、高専からの編入生（高専卒業後に大学の3年次に編入できるシステムがある）が農学部在籍していたことである。研究面では、引き続きコンクリートの凍害に関する研究に取り組んだ。大学院での研究によって感じたことは、農学は“そこ”に暮らす人たちと近い研究分野であるということである。受益者の顔が見えるような距離感での研究であり、このことは非常に魅力的だと感じた。このことは、工学か

ら農学の分野へ変わったことによる気づきであった可能性が高いと考えている。

III. 博士課程

1. 進学の経緯と博士課程での生活

博士課程への進学は、簡単に決めたものではなかった。就職するつもりでいたものの、研究室の先生方と話をしていくうちに、博士課程に挑戦してみたい気持ちが大きくなり、最終的には進学することに決めた。かなり悩んだものの、自分の中にあったのは、「高専から専攻科に進学し、さらに農学の学位を取得する」というレアケースへの憧れであった。当時から、「さまざまなキャリアの人が集まれば、新しい何か生まれるかもしれない」という考えを持っており、その思いが自分の背中を押したのではないかと考える。ただし、進学に際して強い気持ちを持っていたかと問われると、そうではなかったと振り返る。

進学を決意してから、指導教員と日本学術振興会の特別研究員（DC1）の申請書の作成に取り掛かった。そして、面接を経て、DC1に採用していただくこととなった。これは、指導教員のおかげ以外の何物でもなかった。月20万円の研究奨励金で生活するため独立生計となり、半期ごとの授業料の納付の際には、免除申請をすることで半額免除を受けることができた。また、修士課程までは学生納付特例制度を利用していた国民年金保険料も、博士課程進学後は納付を行うようになった。

3年間の博士課程の中で、印象深く、また、自分にとって非常に大切な経験となった出来事が二つある。ここではそれぞれについて述べる。

2. 北海道での経験

博士課程1年時に1カ月半、2年時に3カ月、北海道の寒地土木研究所に招へい研究員という形で受け入れていただいた。寒地土木研究所では、多くの現地調査や実験を行わせていただいたが、研究以外のところで、私に突き刺さる出来事があった。

*松江工業高等専門学校環境・建設工学科



博士課程、日本学術振興会特別研究員、人材育成、高専、高等専門学校、専攻科、編入学

現地調査に同行させていただき、点検用ハンマーを持って落水後の水路の中を歩く機会があった。その日の夜に開催された懇親会の場で、地元の開発局の方からお叱りを受けた。それは、「なぜハンマーを持っていて、ただ歩いているだけなのか」という内容であった。言い訳になるが、自分の中には遠慮もあり、確かに積極的な姿勢ではなかった。加えて、「鳥取から来て頑張っているね」という言葉をかけられる機会が多かったため、この言葉には面食らった記憶がある。しかし、自分の中でこの言葉を消化し、「せっかくの機会を活かしなさい」という意図のほかに「場所を提供していることから、立場など関係なくちゃんと調査してくれ」という意図があったのではないかと推察している。開発局の方の地元のことを考える熱い思いに感化された部分もあり、この出来事は母校で教員として地元へ貢献したいと考えるきっかけの一つとなった。

3. サマーセミナーへの参加

サマーセミナーとは、例年、本学会大会講演会のあとに開催されている学生企画のイベントである。私は、博士課程1年時と2年時の2度参加した。

初めての参加は、指導教員からの強い勧めがあったことであった。参加するまでは、一言で「参加したくない」と思っていた。鳥取大学から一人で参加したため、「田舎で育てて地方の大学に所属している者が出て行って大丈夫なのか」と不安に感じていたためである。参加する直前は、自身の人生の中でも五指に入るほど緊張していたことを今でも覚えている。しかし、終了後の感想は、一言で「参加して良かった」であった。

2度目のサマーセミナーには、幹事として参加した¹⁾。その年の大会講演会は札幌開催であり、大会開催時に寒地土木研究所で研究活動をする予定であったことから、何か力になれるのではないかと考え、すでに4名の幹事が決まっていたところに、凶々しく加えていただいた。2度目の参加ということで精神的にも余裕があり、幹事という立場もあって、前年よりも楽しむことができた。この時に幹事を務めさせていただいたことは、かけがえのない経験となった。

サマーセミナーのおかげで、全国各地に同世代で同じ分野の研究をしている仲間ができ、悩むようなことがあっても「一人じゃない」と思えるようになった。博士課程時には、何かと孤独や不安を感じることも多かったが、全国に似た境遇の仲間がいることを知ったことは、精神的に大きなプラスとなった。

IV. 現在

博士課程3年時の10月から母校に勤務することと

なり、その後の半年間は社会人ドクターとして過ごした。翌3月に博士課程を修了し、何とか無事に学位を取得することができた。

松江高専では、教員として人材を育成する立場にある。高専では本科卒業で準学士、専攻科修了で学士となるが、修士・博士を目指すには大学院へ進学する必要がある。松江高専の場合、例年、本科卒業生の4割程度が進学（編入学と専攻科進学）する。大学側から見ると、人材確保の観点からも、進学志向の高専生は魅力的に映っていると感じている。

高専生は工学部への進学が一般的であり、農学部は選択肢に入っていない場合がほとんどである。進路選択の多様性を確保するためにも、選択肢の一つとして農学部を提示することが、農学を經由して高専に戻った私にできることだと考えている。その際に、自身の経験を伝えることのほかに、大学卒業後の進路一覧を提示することが有効だと考えている。農業農村工学の分野では、就職先として公務員やゼネコン、コンサルタントなどが挙がるため、高専の建設系学科の卒業後の進路と大差ないと感じる。

これまで、卒業研究で私の研究室に所属された学生の中で農学の分野へ進学をした学生はいない。いつか、農学で学位を取得するような学生に巡り会いたいと思っており、レアケース予備軍との対面ができるまで、自分にできることを続けたい。

V. おわりに

高専5年生のころの自分は、農学の博士号を取得するという事は全く想像していなかった。しかし、さまざまな経験を積む機会に恵まれ、現在の仕事にもやりがいを感じている。今後、育てていただいた農業農村工学の分野に少しでも貢献できるよう、これからも今できることを続けていきたい。

引用文献

- 1) 宮坂加理, 及川 拓, 櫻木宏明, 周藤将司, 本田裕理: 農業農村工学会サマーセミナー2012活動報告, 水土の知81(2), pp.39~42 (2013)

[2021.4.16.受理]

紹介

周藤 将司 (正会員)



1985年 鳥根県に生まれる
2011年 鳥取大学大学院連合農学研究科
日本学術振興会特別研究員 (DC1)
2013年 松江工業高等専門学校助教
2014年 鳥取大学大学院連合農学研究科修了
2019年 松江工業高等専門学校准教授